

# 「無関心の席卷する世にあって『太陽の沈む国』で低みに立つ —第 3次モロッコ・ボランティア報告—」

2024年4月30日～5月9日

「カヨ子基金」代表 佐々木 美和

主題聖句:詩篇 113:6「天にあっても地にあっても低きに下って御覧になる方」(『聖書協会共同』  
2018年版)。

目次.....	1
1「太陽の上る国」から「太陽の沈む国」へ.....	1
2 孤児(Igigir(イギギル) [Igigirt])のいる場所へ.....	3
3 孤児の家建設のため、被災して未亡人となったハスナさんが応答(イジュカック州, タラットニヤ コブ地区, ドゴージュ区).....	8
4 アスニ地区の街中では被災格差, 被災による二次被害が広がる.....	10
5 目下, アスニ州とイジュカック州で孤児の家建設を準備中.....	13

## 1「太陽の上る国」から「太陽の沈む国」へ



写真 1: 被災し未亡人となったパドマさん(42歳)(左)と被災し孤児となったアブドサマッドくん(10歳)(右)が被災した家。この寝室でアブドくんは寝ており, 父は部屋のそばの廊下で地震により亡くなった。(2024年5月6日, アスニ)

2024年4月30日～5月9日、第3次<sup>1</sup>モロッコ・ボランティアに、支縁者の皆さま、理事の皆さまに祈られながら、単独で向かいました。孤児の家「カヨ子<sup>2</sup>・チルドレン・ホーム」建設の準備を進めるためです。

第1次～第2次で訪問したモロッコ国最大の地震被災地アスニ、アムスギン、イジュカック地区へ再訪しました。前回よりも、さらに多くの孤児と地震で子どもや夫を亡くした未亡人、障がいを持つかた、親が障がいを持つ被災児童に出会いました。

マラケシュ空港から出ると、前回と同様に万年青年のラシッドさん(37歳)が即座に迎えに出て来てくださいました。連絡していた予定時刻より、今回も2時間以上遅れたにもかかわらず、ラシッドさんは約束の時間より早めに到着し忍耐強く待ってくださっていました。ラシッドさんは仕事が休みにもかかわらず、休暇を返上してボランティアに付き合ってくださいる献身的なお人柄なので2日間にわたる飛行機旅の疲れもいやされました。

ラシッドさんの車で、9割が被災した村、アルハウズ州県のアスニ町村に到着しました(写真2)。前回同様、「カヨ子基金」のロゴマークでもあるコウノトリをモスクの尖塔に目にしました<sup>3</sup>。



写真2: 被災家屋の真ん中で、国民的人気スポーツであるサッカーをして元気いっぱい遊ぶ子どもたち(2024年5月1日、アスニ)

宿泊場所に到着するとすぐに、道路沿いにあるアスニ町村のテント群に向かいました(写真3)。テントは第2次するときには集落全体の規模でしたが、少し減っている観がしました。鶏、ろば、野犬なども自分たちの領域だと闊歩しています。テントの数が減った理由をラシッドさんやハジャールさん(25歳)(第2次ボランティアで同行してくださった女性看護師)が教えてくださいました。

<sup>1</sup> 第1次～第2次の報告はカヨ子基金ホームページを参照 (kayokofund.jp)。

<sup>2</sup> 「カヨ子基金」および孤児の家「カヨ子・チルドレン・ホーム」の名は、阪神淡路大震災を経験され、2016年に神戸市で息を引き取った岩村カヨ子さんの名前から取っています。子どもに恵まれなかったカヨ子さんは、海外の被災地で生きる孤児のことを気かけ、故人の残した財産を基金として2017年から活動が始まりました。

<sup>3</sup> 第2次ボランティア報告 p.1, 写真1参照。ホームページ : <https://kayokofund.jp/>

仮設に入居できた方、新たに家を建てて住めるようになった人もわずかですが、おられると耳にしました。



写真 3: 9 割のテントが撤退したが残っているテントの家の周りで遊ぶ被災した子どもたち(2024 年 5 月 1 日, アスニ)

## 2 孤児 (Igigir [Igigirt]) のいる場所へ

モロッコでは、夫を亡くした場合、遺された女性は働くことができないことが多くあります。特にこのたびの震災のようにベルベル民族ゆかりのかたが多く住む山間部が被害を受けた場合は、都市と異なり働くことができない女性ばかりです。

父親がいない子ども、親がいない子どもはベルベル語で「Igigir (イギギル)」女性形「Igigirt (イギギルト)」と言います。地震で親を亡くしたイギギル、イギギルトに出会うことが「カヨ子基金」の主要な使命です。



写真 4: 地震で夫を亡くしたが気丈にふるまい 4 人の子どもの母であるパドマ・イドブラヒムさん(右)(5 月 1 日, アスニ)。女性は基本的に外出時, 異性の前, 公に出る写真の前では, パドマさんのようにニカブなどのヒジャブ(覆い)をかぶります。

5月1日、アスニ村で、父親を亡くした孤児の兄弟ファティマさん(17歳)とアブドサマッドくん(10歳)、夫を亡くした未亡人パドマさん家族(42歳)に出会いました(写真4,5)。



写真5: 被災孤児のアブドサマッドくん。上の兄弟に劣らず利発で、筆者と英語やフランス語で話してくれた。お母さんも自慢の末息子。(5月6日、アスニ)

アスニの被災地ではテント生活が主流でしたが、子どもたち4人と母親パドマさん(42歳)が暮らしていた仮設はコンテナ製です。夏に向かう季節において、日中は高温になりすぎてのぼせて目眩がするほどです。しかし、アスニ地区の被災した家々はまだ解体が手つかずの有様です。高校生のファティマさん(17歳)が筆者を被災した家まで案内してくださいました。案内する道中も、平坦ではありません(写真6)。



写真6: ファティマさんが被災した家まで案内して下さった。地震の影響が伺える道中。(5月6日、アスニ)

区内は崩壊したあとの石などで道が覆われていました。半年に及ぶ居住によって一部通りが修復されていましたが、区内の90%が被害を受けた地域です。二次避難で別の場所に移り住んだ人々もいますが、倒壊した家の近くでテント生活を継続する被災者もいます(後述、4章参照)。

2023年9月8日、モロッコ国マラケシュの山岳地帯を襲ったマグニチュード6.8の地震で、モロッコでは3000人以上が命を落としました。11月、第1次ボランティアに訪れ、孤児たちの世話をするハビバさんと出いました。



写真7:被災した家の中。この部屋でアブドサマッドくんは寝ていた(5月6日、アスニ)

第2次ボランティアから3ヵ月を経て、ハビバさん(25歳)、ご家族たちと旧交を温めました。このたびの第3次、ハビバさんたちを訪ねたウィルガン州のイルブールで、地震で娘と妻を亡くした目の不自由なアブラフマンさん(39歳)と出いました(写真8)。



写真8:真ん中が目に障がいのあるアブラフマンさんと5歳の娘ドーハ・アイツァレムちゃん(5月1日、イルブール)

地震前から、障がいのために、仕事に困難を覚えておられました。逆境にあつて被災されました。アブドラフマンさんは、「両親を亡くし、最愛の奥さんを亡くし、二人姉妹のうち若い娘を亡くした」と、寂しげに筆者に語られました。アブドラフマンさんは亡くなった妻の妹と結婚をなさいました。生き残った5歳の娘ドーハさんの幸せを第一に考えてくださるサイドさん(幸せという意味)に感謝しておられます。

翌日、さらに道路状況が悪く電波も届かない南のアムスギンとイジュカックへ向かいました。アムスギンではアイシャ(62歳)と、イジュカックではマフジュバさん(61歳)と再会しました。マフジュバさんは、再会したつい前日に、喉の手術を終えて病院から退院したばかりでした。前回、マフジュバさんはアーモンドをご馳走してくださいました。今回も、「病み上がりだから」と帰ろうとする筆者を引き留めて、食卓に地元産のアーモンドが並べ、さらに、同じく地元産のピスタチオが並べてくださいました。日本と異なり、庭先で採れるような日常食の食べ物です。温かい包容力でもてなしてくださいました。ご近所のエルコシュ・アイトウタフケルトさん(72歳)も客人在ることを察知し、やってこられました。エルコシュさんは何度も筆者に「マルハバ！マルハバ！（Welcome! Welcome!）」と笑顔で、大きな声であいさつしてくださいました。その歓迎ぶりに異国ではなく、実家に帰った思いに満たされました(写真9)。

アムスギンのアイシャさん(62歳)は、前回のテントの場所にいらっしゃらないので、被災場所の方たちに尋ねると仮設に移られたと耳にしました。場所を尋ねるとすぐに教えてくださいました。



写真9: 左からエルコシュさん、マフジュバさん、筆者  
(5月2日、イジュカック)

アムスギンの仮設テントも、既に10分の9はなくなったようでした。車で走ること3分ほど、歩くと息が上がりそうな距離のところ、仮設住宅があります。筆者が訪問する3日前に入居なさっていました。以前の倒壊した家と比べれば、大きさは10分の1以下といっても過言ではなさそうです。コンテナ製の仮設はおひとりが住まれる空間です。しかし、以前のテント暮らしとは違います。蛇口を

ひねれば水が出て、自由に水が使えて、洗濯機が使えることをアイシャさんは喜んでおられました（写真 10）。



写真 10: アムスギンのコンテナ仮設に暮らすアイシャさんと再会した（2024年5月2日、アムスギン）。

仮設住宅は数に限りがあります。仮設に入れない被災者は震災後からずっと雨水、川や洗濯板を用いて洗濯を余儀なくされているのは日本の奥能登の珠洲市の被災者と同じです。

アイシャさんは数カ月に一度カサブランカから訪ねて来る3女のザラさん(41歳)ともお会いすることができました。今回ザラさんは祝日を活用してこられていました。限界集落、消滅集落になってもモロッコのベルベル人は家族愛の絆が強く、初対面で、言葉、民族、宗教が異なってもひとつになれたことは感動でした(参照: 第2次モロッコ・ボランティア報告)。モロッコも日本で問題になっている孤独、孤食、孤立死の兆しがないとは言えません。アムスギンからすぐ隣に位置する村イミデル(Imidel)では、35世帯のうち3分の1以上である12世帯が独居の高齢者です(5月2日)。過疎、高齢、少子化問題です。独居の高齢の女性たちの中には、子どもがいるのに一人で暮らしています。大家族で住むより、息子若夫婦だけのエンジョイする生活を好む西側諸国の影響の波が忍び寄っています(後述, 4章)。

アイシャさんは一人でお暮らしです(写真 11)。娘ザラさんが帰って来たとしても、現在の仮設は1Kです。

ドアを開ければすぐキッチンがあり、ダイニングは穴が開いている陶器のトイレと寝室と洗面台に囲まれた廊下のスペースに円卓がやっと置ける広さです。3人で座ればいっぱいです(写真 12)。

寝室でアイシャさんがザラさんと二人で寝られる余裕なスペースはなく、すし詰めになります。人と談笑ができるスペースも限られるにもかかわらず、筆者が訪問すると歓迎し、狭いながらも温かいもてなしがキッチン兼ダイニングのスペースに行きわたります。利他的に工事中の男性たちにタジン料理をふるまっていたお昼の残りで、筆者をもてなしてくださいました。うれしくて喉につまりそうでした。

アイシャさんの仮設にはキッチン、洗面台、冷蔵庫、トイレが付いています。冷蔵庫はフランスからだといえます。



写真 11: アイシャさんの仮設内  
(2024年5月2日, アムスギン)。



写真 12: 左からアイシャさんの3女ザラさん, 筆者, アイシャさん。収入もないはずだが  
卓上に見えるご馳走をふるまってくださいました(2024年5月2日, アムスギン)。

シャワーはありません。まだ仮設住宅に移ることができていない人たちは、トイレさえテント内にはありません(4章)。もちろん被災した家でも水道は通っておらずお手洗いは使えないままです。公衆トイレを使います。発災から既に5か月目に入っている現在(2024年5月)の能登と同様の状態です。

### 3 孤児の家建設のため、被災して未亡人となったハスナさんが応答 (イジュカック州, タラットニヤコブ地区, ドゴージュ区)

5月2日, タラットニヤコブ地区, ドゴージュ区で, 孤児(バルベル語で Igigir)がいるかを聞きま



した。すると、アラビアさん(33歳)(写真13, 左から2人目)とファタムザラさん(28歳)(写真13, 右から一人目)が隣村で複数の孤児や未亡人がいることを教えてくださいました(上部写真13左から2人目がアラビアさん、左から4人目がファタムザラさん)。隣村のことであるにもかかわらず、お二人は未亡人と孤児の年齢と名前を述べることができました。



写真13: 壁面に見えるのはテントの壁。第2次で出合ったアラビアさんとファタムザラさんらと再会。一番左から、ファタムザラさんの妹、アラビアさん、アラビアさんの次男ヤシン、同長男ユシフ、ヤシンとユシフの友人、ファタムザラ。(2024年5月2日、タラットニヤコブ地区)。

被災未亡人となったハスナ・マナールさん(38歳)は被災孤児となったヘイテムくん(6歳)が唯一子どもたちの中で生き残りました。ハスナさんは信仰深く目を除いた全身が包まれるヒジャブを身につけており慎ましい格好をしています。顔や全身を覆っているヒジャブでは女性は働くことができないといいます(5月5日、アラビアさん、ファタムザラさん談)<sup>4</sup>。

アラビアさんとファタムザラさんとともに、ハスナさんに会いに行きました。

愛する配偶者を失ったこと、息子と娘を失ったことを聞き、私は座って聞いていたところから立ち上がり、近づいて抱擁しました。抱き合って、しっかりと抱き締めると、ハスナさんは肩を震わせて泣きました。無言で抱き合い、二人とも目を泣きはらしました。暫く誰もなにも言いませんでした。ハスナさん

<sup>4</sup> 詳しく伺うことができなかったが、敬虔な信仰の象徴であるとはいえ2017年よりブルカの販売が禁止されたモロッコにおいて顔と全身が覆われているベール着用は就職を困難にしている可能性が考えられる。Al Jazeera” Reports: Morocco bans sale of full-face veil” (<https://www.aljazeera.com/news/2017/1/10/reports-morocco-bans-sale-of-full-face-veil>)2024/5/18 アクセス。

は泣き止むのに時間がかかりました。泣きながらしかしハスナさんは「Hamdella」と信仰深くつぶやいていました。

ハスナさんは亡くなった息子さんのヒムランさん(15歳)とヒバさん(11歳)の写真を見せてくださいました。

私は座り込んで親を亡くした子どもに家を建てるために来たと話しました。誰か孤児の世話をするひとが思いつかないかと尋ねました。「誰も思い付かない」とハスナさんの亡き夫の姪であるノルさんが言いました。私が「ハスナさんは？」と訊きました。ハスナさんは小さくうなづきながらなにか答えました。姪のノルさんが言いました。「she said yes」

ハスナさんは、5人の子どもの世話をすることについて「はい」と答えてくださいました。ハスナさんがカヨ子・チルドレン・ホームのために土地を提供したいと仰ってくださった土地でアラビアさん、フアトマザラさん、ハスナさんと息子のヘイテム君で写真を撮りました。

区議会では「ハスナさんを支えよう」と集まりました(写真 14)。



写真 14: タラットニヤコブ地区のプレジデントと母子課の役人などとともに。タラットニヤコブ地区の役所にて (タラットニヤコブ, 2024年5月6日)。

#### 4 アスニ地区の街中では被災格差, 被災による二次被害が広がる

タラットニヤコブからの帰り, 前回, 寛大に土地を無償で提供してくださったアスニ地区議長ジャマル氏に再会し兵庫県と神戸市からの親書を渡しました(写真 15)。

ジャマルさんはイムリルとアスニという2県にまたがるほど広大な範囲にわたって議長を務めていらっしゃる。このたびも, イムリルに行った帰りにわざわざ筆者のために時間を作りアスニに寄ってくださいました。



写真 15: ジャマル・イメルハン議長に再会。親書を手渡した  
(2024年5月6日, アスニ)。

親書を手渡したアスニの役所庁舎の向かいの通りを、一人の女性が四つん這いで手を地面につきながら、地面を見つめる低い視線で歩を進め、手頃な木のそばで腰を下ろしました(写真 16)。



写真 16: アスニ路上ファティマ・ルミアイ(85歳)  
(2024年5月7日, アスニ)。

被災し道端に座る独り暮らしのファティマ・ルミアイさん(85歳)は2章でも述べたように、息子がいながら独りでテントで暮らしています。結婚した息子が母親の顔を見に来るのは年に1回か、数年に

1 度程度だといいます。現在彼女が暮らしているテントも日中は暑く、サウナのように高温となるため、昼間はテントから出て、通りに座り込んでいる様子でした。血のつながった家族は天変地異で辛いとき訪ねて来ませんでした。大阪北部地震、コロナ渦中の熊本・人吉などで何度も見聞きしたことです。

親戚のハムザさんもファティマさんと同じテント群に暮らしています。地震後カフェでの仕事を失い、朝ごはんを買いに通りを歩いているところでした。ハムザさんにお茶に誘われ、テントに行き朝ごはんを一緒に食べました(写真 17)。



写真 17: 左からハジャール(サハラ民族)、ハムザ、ジュディア(1.5 歳)。右奥にいるのは別のテントで暮らす甥。みんなでご飯を食べた。写真に映っているものが地震後の全財産。(2024 年 5 月 7 日、アスニ)。

手のひらに収まる大きさのパンに、チーズひとかけの食事です。1 歳半の病気がちなジュディアちゃんのご飯は白米のみです。これで何日も食いつないでいました。サハラ民族のハジャールさん(37 歳)、ハムザさん、一人娘のジュディアさん一家 3 人は、テント暮らしを続けながら 1 日 5 ディルハム(約 55 円)で家族全員分のパンを買い、子どもの病気と向き合っています。病気が引き起こされたのは写真(17)の左奥に映るテントが太陽に焼ける化学反応が原因の気管支炎でした。そこで、文字通り木とありあわせのもので作った写真右奥に見える急ごしらえの壁でテントを拡張したといいます。夜は野良犬がうろつき外の真っ暗な公衆トイレにも行けず尿瓶を使います。

この写真(写真 17)に写っているものが、ハジャールさんとハムザさんの全財産です。ハムザさんは「お金持ちだけが新しく家を建て始めている。」と述べました。

全体で 350 あったテントは、いまでは数十戸となり、打ち捨てられている感があります(写真 18)。「われわれは被災しここに投げ出され、道路のすぐそばで泥棒が入れるような鍵のない家に住んでいる。なぜわれわれは苦難を強いられているのか。(復興予算などあるはずなのに)役人、行政が財政を横領している。」とハムザさんは言いました。アッラーの義を行う代行者として見られがちな支配層、行政や役人に対して批判する人に筆者は初めて出合いました。辛酸をなめているひとのほうが、低い視点から物事を見極めていると思いました。ちょうど、機構が毎週木曜日に行う炊き出しで出会う路上の生活者のかたの鋭い言葉と似ています。

お金持ちだけが家を建てている、とハムザさんが語る言葉は、他の市民からも耳にしました。ラシッドさんによれば、カフェ店員などごく一般的な仕事の給料は一日 1,500 円ほどです。日本なら最低賃金で 2 時間も働けば稼げてしまう額です。一か月 35,000 円ほどが平均的な給料です。ところが、家を 1 棟建てるのには、最近のセメントの価格高騰もあり(訳 1.6 倍の値段となったという)少なくとも 140 万円が必要と言われます。ハムザさんのように地震で失業したひとも多いなか、運よく収入があったとしても、1 棟を建て直すのには少なくとも 40 カ月＝約 2 年はかかります。2 年は単純計算です。働きどおして 1 銭もお金を使わず貯金した場合の年数です。実際は家族を養わなければならないうえに、自己負担額が 100%の医療費が突然必要になる事態が発生すれば、とても貯金できないでしょう。



写真 18: 家を建てられない市民が暮らし続けるテント。第 2 次ボランティアでは目の前の土地一面にひしめきあっていた。被災者に供給されたテントは新品ではない上に、夏場を迎え健康被害を生むほどの高温となっている (2024 年 5 月 7 日, アスニ)。

## 5 目下、アスニ州とイジュカック州で孤児の家建設を準備

アスニ州では議員のイメルハン氏と連絡を取り合いながら土地と家屋の選定を進め、既に入居が見込まれる孤児が 3 名います。イジュカック州ではハスナさんが孤児の世話を取ることを請け負ってくださいました。入居が見込まれる近隣の孤児は既に 3 名います。そのうち全員が被災による孤児、また、未亡人となった母親は働くことが叶いません。アムスギンでは少なくとも 5 名の被災孤児がいることがわかっています。カヨ子基金では孤児が安心して食事をし睡眠をとり学校に行くことができるような孤児の家建設を目指し、継続して準備を進めます。皆さまのご協力をお願い申し上げます。

## 謝辞

原稿を校正いただきました岩村義雄会長，原稿の印刷を指揮してくださいました村上裕隆代表，校正のため原稿を確認くださった村田充八理事をはじめとした理事の皆さま，モロッコの被災者の心を癒されるような人形を手作りくださった宮城県石巻市の木村勝 & ふみ子 様ご夫妻，愛知県小牧市の小林万里子様とお母さま，叔母様に御礼申し上げます。